



北海道占冠村

人とのつながりで築く 住民のための住民による社会教育

日本各地には、小さくても独自の取り組みで地域を活性化させている教育委員会がある。

今号から、そうした自治体で日々奔走している職員の方々の活動を紹介します。

第1回は、北海道札幌市から高速道路を利用して車で100分の距離にあるしむかっぷ占冠村だ。

人口約1,200人の村では、住民の声を大切に、村の良さを生かした活動を行っている。

占冠村教育委員会
社会教育担当係長
竹内清孝さん

北海道占冠村

北海道のほぼ中心部にある占冠村。自然が豊かで、冬はウインタースポーツ、夏はラフティングなどが楽しめる。トマムリゾートを有し、外国人観光客も年々増えている。

- 人口 1,247人（うち60歳以上401人）
- 面積 571.41km²
- 保育所2所 小学校2校 中学校2校
- 児童生徒数 90人
- 電話 0167-56-2183（教育委員会）
- URL <http://www.vill.shimokappu.lg.jp/>



教育委員会の同僚と事務局にて。

住民の声をヒントに 村の活性化を図る

2015年度に文部科学省が公表した、地域住民の生涯学習活動に大きく貢献した77の優良公民館の1つであるしむかっぷ占冠村公民館は、特に優れた活動を行ったとして「優秀館」（全国5施設）にも選ばれた。評価されたのは、住民や関係団体との連携による、村木のカエデを活用したメープルシロップ作りの研究だ。この企画・運営を進めたのが、占冠村教育委員会社会教育担当の竹内清孝係長だ。

「村の豊かな森林資源を活用して、何か公民館活動ができないかとずっと考えていました。そんな時、公民館を応援してくれている方から気象条件の近いカナダのメープルシロップ

プの情報を頂き、住民の方々と一緒に挑戦したいと思いました」

竹内係長と公民館の職員の呼びかけに応えた住民が、共に1日の樹液の収穫量を調査したり、試作品作りを繰り返しながら研究を進めた結果、納得できるメープルシロップが完成した。現在は、林業振興室が研究を引き継ぎ、村の新たな特産品として生産・販売を検討している。

「住民が研究して作り上げたものが村の特産品になれば、こんなにうれしいことはありません。さらに、子どもたちの食育や環境教育のために、研究に携わった住民が支援して小学校での出前授業を行うなど、新たな展開にもつながっています」と、竹内係長は手応えを語る。

人と人の結びつきが 新たな発見につながる

竹内係長が常に心がけているのは住民の声に耳を傾けることだ。8年前に教育委員会に異動してすぐに、60歳以上の高齢者が学ぶ「清流大学」の年間プログラムの立案担当となった。人生経験豊かな学生を相手にどんな授業にすればよいか悩んだが、自分が何かを「教えてあげる」のではなく、学生から何がしたいのかを「教えてもらおう」と考えを改めた。

「私自身に発想がなかったからこそ、住民の思いを聞き、その具現化のお手伝いをしようと思ったのです」

その1つである「自主創造プログラム」は、住民の発想を自主的な行動につなげようと、住民から企画を

*プロフィールは2016年3月時点のものです。



60歳以上の高齢者が学ぶ 清流大学

清流大学と北翔大学の交流会は、竹内係長の司会で和やかに進む。清流大学は開学22年目で、年間18回のプログラムがある。現在の在籍者数は35人で、うち2人が80歳以上だ。



双珠別の集落を北翔大学の学生が毎年訪れ、住民から暮らしの様子を聞く。高齢者が語る話は、集落の歴史そのものだ。

大学生が村民から 地域史を学ぶ

公民館事業で 村木のカエデから メープルシロップ の作り方を研究！



村内の山にたくさん自生しているカエデの木。木に小さな穴を開け、樹液を採取。それをろ過して、煮詰めていくとメープルシロップになる。煮詰める量や時間をいろいろ変えながら、おいしさを追究していった。



募集し、応募者が運営も行うものだ。年間14件ほど応募があり、基本的には全て実現に向けて教委が支援する。

人との結びつきも大切にする。北翔大学で生涯教育が専門の谷川松芳教授のゼミに、清流大学が研究協力をした縁で、清流大学の授業の1つとして学生が北翔大学を訪れ、谷川教授の授業を受講することとなった。清流大学の学生が教室の最前列で真剣に話を聞く姿は、北翔大学の学生にも大いに刺激を与え、今度は北翔大学の学生が清流大学を訪れて懇談会を開くなどの交流に発展している。

また、谷川ゼミは、ここ数年、村の中でも住民50人ほどの双珠別そうしゅべつの集落を訪れ、聞き取り調査を行っている。集落に70年以上暮らす高齢者から、結婚を機に移り住んできた子育て

世代までの住民が公民館に集まり、集落の暮らしについて語る。生活や仕事を馬に頼っていたことや、自身が体験した昔の結婚式の様子など、地域の歴史が感じられる話に、学生は深くうなずきながら聞き入る。ゼミには卒業後、北海道の自治体職員となる学生も多く、地域の歴史に直接触れる貴重な体験になるという。

「小さな村のさらに過疎化の進む集落が重要な教育資源になると、谷川教授に教わりました。また、高齢者の方たちは、若者に伝えることで生きがい生まれ、双方にとって良い交流になっています」(竹内係長)

身近にある村の良さを 積極的に生かしていきたい

札幌市出身の竹内係長は、大自然

に魅せられてこの地に移住したが、当初は自然以外には何もないと思っていた。しかし、社会教育担当となり、公民館、図書館、スポーツ、子ども会など様々な活動を通して住民と深くかかわるようになると、村の良さを次々と発見していったという。

「ラフティング*のガイドのネパール人を先生としたカレー教室を開きたい」「双珠別交流会で聞いた嫁送りの歌を再現した結婚式をしよう」など、次々とアイデアを出す竹内係長。今後は村の良さを村外にも伝えたいと語る。

「住民が豊かになる活動であれば、どんなことでもできるのが社会教育の良さです。住民の声を聞き、村外の人たちの視点も取り入れながら、人々が生き生きとするような活動に挑戦していきたいと思います」

*ラフト(いかだ)を利用して川を下るスポーツ。